

書 評

志村真幸編『異端者たちのイギリス』

(共和国、2016)



小澤 央

本書は、京都大学教授(現名誉教授)の川島昭夫氏の退官を記念して、編者の志村真幸氏をはじめ、川島氏とゆかりのある32名の研究者が寄稿した論文集である。「異端者」という視点からイギリス史を捉え直し、「これまで十分に注目されてこなかったイギリス社会の諸側面を提示」しようとする大胆な試みであり(志村「はじめに」)、収録作品が扱うテーマも多岐にわたる。

本書は四部より構成され、各部には複数の論文と比較的短い文章(以下、便宜的に「コラム」と呼ぶが、実際は一般的なそれよりも長く充実している)が含まれる。紙面の都合上、各部の概要では論文のみを紹介するにとどめる。ちなみに私は20世紀英語文学を専門としており、以下の文章もこの限られた知識から書かれていることをご了承願いたい。

第一部「異端者たちの系譜」には6論文、1コラムが収録され、主にイギリス本国の異端者あるいは異端的な話題について議論される。「信用と偽造」(坂本優一郎)は、七年戦争直後に起きた貿易商会をめぐる手形偽造事件を取り上げ、信用経済において貿易商会の末端従業員が果たした役割の大きさ(同時に商業経済の基盤の脆弱さ)を明らかにする。法廷資料を丹念に辿った事件の再構成が醍醐味。「急進主義者の後半生」(金澤周作)は、「改革の時代」の急進主義者として知られるジョン・ウェイドの改革後に着目し、彼が初期から一貫して民衆啓蒙家であったという見解を披露する。著作と回顧から導かれる人物像のギャップが興味深い。「都市の共同墓地」(久保洋一)は、19世紀の教区教会墓地、民間共同墓地、自治体共同墓地の關係に注目し、それらが共同体における宗教を反映させる場でもあった

と主張する。聖別地(国教会の聖職者による宗教儀礼で聖別された埋葬地)と非聖別地の区別など、墓地について無知に等しい私にとって新鮮な論文であった。「絶対平和主義と宥和政策」(小関隆)は、第一次世界大戦中の良心的兵役拒否者クリフォード・アレンの1930年代に注目。軍勢力依存の現実と格闘しつつ非戦を模索するアレンの苦悩は、今日の平和主義者にも共有されうる。「大戦・ファシズム・同性愛」(林田敏子)は、戦間期に男性として生活(結婚まで)していた女性、「バーカー大佐」を論じたもの。女性にとっての異性装・同性愛の意味は男性にとってのそれと必ずしも合致しない点が改めて興味深い。「イングランドにおける「低能児」」(大谷誠)は、1930年代から1950年代にかけて低能児(軽度の精神薄弱児すなわち魯鈍児と普通児の中間に位置する)への社会的対策が、家庭環境や社会適応性などを視野に入れたものに発展していく過程を分析。文学研究者としては、障害者という視点でこの時代の文学を論じる可能性について考えさせられた。

第二部「娯楽のイギリス」は7論文、1コラムから成り、スポーツ、旅行、料理などエンターテインメントに関する論考が続く。「一七世紀のオリンピック」(石井昌幸)は、コッツウォルズで毎年春に催される競技会「ドーヴァーズ・ゲーム」について、それがドーヴァーにより創始されたと伝えられ「オリンピック」と称されるに至った経緯を探る。詩集『アンナーリア・ドゥブレンシア』(1636)の分析を通して進む謎解きが面白い。「一九世紀の風雲児、ジョージ・ベンティンク卿」(鍵谷寛佑)は、政治的には保護貿易派のリーダー、カントリー・ジェントルマンの代弁者として活躍し、文化的には競馬統括団体の幹事として観客や公平性を重視する改革を敢行し、スポーツとしての競馬の発展に寄与したベンティンク卿の魅力を存分に伝えてくれる。「フットボールとスコットランド」(田中健太)は、グラスゴーに本拠を置くセルティックとレンジャーズの設立から、ダービーマッチが形成されるまでの経緯を扱う。宗教観の相違のみならずアイルランド(移民)という視点の重要性が説得的に論証される。「プロ・フットボールのガバナンスとチャールズ・サトクリフの理念」(藤井翔太)は、世紀転換期のイングランドでフットボール・リーグのガバナンス確立に貢献したサトクリフについての論考。メディア戦略やレフリー制など、今日的なテーマと関連深い。

「トマス・コリヤット」(スガンディ・アイシュワリヤ)は、エリザベス朝時代に欧州・中東・インドを周遊したコリヤットが、固定観念から自由な旅人として読者に生の情報を提供しようとした姿を語る。その「異端児」の功績が魅力的に描かれる。「一九世紀の「盲目旅行家」ジェームズ・ホルマン」(坂元正樹)は、目が見えないことにより独特の視点を持つ旅行家となった退役軍人ホルマンについてのもので、旅行記を著す上で盲目が信頼性や正確性の高い情報収集・提供に貢献した可能性を指摘する点が示唆に富む。「ドクター・ウィリアム・キッチナー」(妹島治彦)は、摂政皇太子時代的美食家キッチナーの人生と活動をまとめたもの。学歴・ドクターの詐称、美食委員会と呼ばれる「合理的」食事会など、ユニークな逸話が実に面白い。

第三部「イギリスのなかの「異国」」は4論文、9コラムを収め、イングランドの外に広がる「帝国」を視野に入れた議論を繰り広げる。「オルタナティブ・メディアとしての「海賊ラジオ」」(加藤昌弘)は、スコットランド「自治」を訴えるラジオ・フリー・スコットランドの初期活動(1956年～1965年)の実態や意義について論じる。リスナーを放送に惹きつける努力、市民やBBC内の協力者・共感者の存在などの具体的エピソードが光る。「「キリスト教知識普及協会」の事務長になった「アメリカ人」」(山本範子)は、ヘンリ・ニューマンを通して名誉革命体制初期におけるボランティア活動の政治的意味を考察。ボランティアズムという観点でヒトの移動、イギリスの植民地拡大を捉える所が新鮮であった。「ある帝国主義者の挑戦と苦悩」(川村朋貴)は、19世紀中期のロバート・モンゴメリー・マーチンのアジア向けのロンドン銀行計画とその失敗の分析だが、彼の野心的な挑戦が東インド会社、ジェントルマン資本主義体制の現実に挫かれる様子がリアルに描かれている。「初期南アフリカ共産党の人びと」(堀内隆行)は、南アフリカ共産党の初期活動(1920年代・1930年代)を、具体的な共産主義者の名を挙げて紹介。イギリスや帝国について考える際の南アフリカ、共産主義者という「異端者」の視点の重要性を気づかせてくれる。

第四部「南方熊楠のイギリス」には3論文、1コラムがあり、どれも19世紀末にイギリスに滞在した熊楠に関する研究である。「H・P・ブラヴァツキーと南方熊楠の宇宙図」(橋爪博幸)は、人類の起源や本質を眼に見えない世界に求めた同時代人、熊楠とブラヴァツキーの思想を比較したもので、

熊楠がオカルティズムと距離を置こうとしつつブラヴァツキーの宇宙観に惹かれていく様が面白い。「東洋の星座」再論(松居竜五)は、熊楠にとって『ネイチャー』に初めて掲載された論文について最近発見された資料から検討。後段にある熊楠の英語論文執筆の経緯が、英語教育に携わる者としては特に興味深かった。「南方熊楠と『ネイチャー』誌における天文学」(志村真幸)は、「東洋の星座」および掲載雑誌の『ネイチャー』の性格や意義を論じる。当時の科学において果たしたアマチュアの役割の大きさが印象的で、翻って現在のアカデミズムについて考えさせられる。

本書の意義は、一つには、情報の豊富さ、その雑多性にあるだろう。異なる時代、地域、分野を扱う論考が次から次へ現れるので、読者は刺激的なエピソードとともにイギリス史の豊かさを実感することができる——何しろ手形偽造事件に始まり南方熊楠に終わるのだ。しかしこれは、個々の論文の分析や議論が表面的であることを意味しない。むしろそれぞれの論者は専門的知見に基づく注意深い考察を提供している。例えば私自身の研究に関して言えば、戦間期の文学をジェンダーやセクシュアリティの観点から論じることがかなり以前より流行しているが(私自身もそういう論文を書いたことがある)、林田論文が焦点を当てたバーカー大佐については知らなかった。ことほどさように、非常に個性的で時に挑発的な「異端者」や彼らに対する端的で緻密な分析に遭遇するたび、読者は、自分であればこの情報をどのように自身の研究に結びつけるだろうかなどと愉快的想像を味わうことができる。分野を問わず広くイギリスに関心を抱く者にとって、論文(あるいは話)のネタ探しとしても活用できそうである。

結局、異端者とは誰か、異端とは何なのか。G・K・チェスタトン『異端者の群れ』(1905)の冒頭でこう述べている——「昔は、異端者は異端でないことを誇りとしていた。世俗の王国、警察、判事こそ異端で、自分は正統だった。そういうものに反逆して得意になっていたのではない。そちらが彼に反逆していたのである。(…)さびしき荒野にただひとり立っていたにせよ、彼は人間以上のものだった。教会だった。彼は宇宙の中心、彼をめぐって星は動いていた」(これに対し今日では異端者が異端であることを自慢し喝采を求めるようになっていくという嘆きが続く)¹ もちろんチェスタトンのいう「異端」「正統」はキリスト教の信仰を前提とするから、

本書の表題にある「異端者」、すなわち「宗教的なそれではなく、社会的・文化的な意味のものであり、イギリス社会のいわば傍流に位置する人々」(「はじめに」)とは必ずしも合致しない。とはいえ本書に登場する「異端者」もまた、自分たちが異端であるとか傍流に位置するとかを特に自慢することなく、むしろそれを当然のこととして、つまり自らの人生を正統なものとして生きていたのではないか。「異端者」は同時代の社会からあるいは今日の私たちから与えられた一方的な評価にすぎないのかもしれない。実際、本書で描かれる「異端者」の多くは、その発想の独自性や実行力から見て、自分の生き方に対して確かな信念を抱いていたように見える(例えば第四部がフォーカスする熊楠、コラム「海賊女王の邂逅」[川口美奈子]に登場する、エリザベス一世と堂々と面会し意気投合した女海賊のグレイス・オマリーなど)。

本書が対象とする「異端者」には、存在自体があまり知られていない人物のみならず(コラム「あるアイルランド人の死」[小林久美子]ほか)、存在は有名だが知られざる一面を持つ人物も含まれる(小関論文、コラム「式典プロデューサーとしてのウォルター・スコット」[以倉理恵]ほか)。編者が言うように、「異端ないし傍流がときとして正統や本流と入れ替わる」のであり、「異端と正統の関係は固定的ではな」いのである(「はじめに」)。

確かに本書は「イギリス」の「歴史」に関するものだが、同時に「現在」の「日本」にも多分に示唆的である。これは本書の随所に現れる「われわれ」「私たち」の表現に象徴される(例えば加藤論文は最後に、今日の「私たち」がオルタナティブで参加型のメディアを必要としていると主張する)。本書が掲げる次の強烈なメッセージは、「私たちの社会」(これには現代日本ともアカデミックな世界とも代入できる)に向けられている気がしてならない——「異端的なるものを抑圧し、平準化の圧力をかけてくるような社会に進歩はない」(「はじめに」)。

注

- 1 別宮貞徳訳、『G. K. チェスタトン著作集5 異端者の群れ』、春秋社、1975年、4頁

——明治大学専任講師